

# 平成30年度「不登校を考える学習会」(第4回目)を行いました。

2019.1.19(土) 小郡市人権教育啓発センター

## 演題：困った子は困っている子

～人間関係の“絆”から不登校を考える～

講師：奥村 賢一 さん

福岡県立大学 人間社会学部社会福祉学科 准教授



不登校の経験者・保護者、区長、民生児童委員、学校関係者、行政職員など参加者40人で学習会を行いました。奥村さんは、ソーシャルワーカーなどの経験から、「不登校の子は困った子ではなく困っている子」という見方を基本に話をされました。いくつかその内容を紹介します。

- 近年、愛着形成に課題を抱える人が国内外で増えている。「愛着」のもともとの意味は、親と子の間に生まれる“絆”。この「愛着」は主に乳幼児期に育まれるもので、信頼関係を築いていく上で重要なものである。

「愛着」を阻害する要因として

- ① うれしい時に笑う、悲しい時に泣くといった自然な感情表出を無視する。
- ② 「お腹がすいた」「おむつを替えて」ということを、泣くといった行為で伝えるなどの身体的欲求を無視する。
- ③ 世話人＝自然な感情表出や身体的欲求を受け止める人が、繰り返し変わる。

などがあげられる。心情が絡み合うことにより、「愛着」が形成され信頼関係がうまれる。

- 保護者の膝の上に抱かれていた子が成長して膝を離れ、興味のある場所に探索行動に出た際に、いつでも戻れる「安全基地」＝「避難場所」の存在は大事。学校にもそんな「安全地帯」が大切。「安全地帯」は単なる「場所(スペース)」というだけでなく、「人」にも置き換えられる。「何かあったらいつでも帰ってきていいよ。」は不登校の子や心が疲れている子にとっては魔法のフレーズ。
- 子どもたちに意思決定できる力をつけることも大事。その際、対話の中で子どもの表現力を高めることが大事。大人は早く答えや原因を知りたいがるので、原因追及の疑問詞「why?(なぜ?)」を使いたがる。「why?(なぜ?)」以外の疑問詞を上手に活用して、話を広げることが大事。

- 聴き方の3原則は「受容」「傾聴」「共感」

- ・「受容」…大人の価値判断をはさまない。  
「あなたの気持ちわかるよ」ではなく、  
「あなたの気持ちをわかりたい」
- ・「傾聴」…相手の話を遮ることなく最後まで聴く。  
「こういうことだね。」とまとめない。
- ・「共感」…自分の役割、立ち位置を自覚しながら  
自分にできることを考える。



【学習会の様子】

不登校の子への関わり方にとどまらず、人間関係を築いていく上で大切なことを具体的に話してもらいました。私たち大人の言動が、子どもたちを追い詰めていないかを振り返ると同時に、私たちも心にゆとりをもったり、子育てについて相談したりすることが「信頼関係」をつくり、よりよい人間関係を育むことにつながっていくのではと思いました。

- アンケートの声より

・“絆”というのは見ることはできないけれども、構築することはできると感じる事ができま

した。日

頃の忙しさにかまけて、ともすれば禁止や罰則を子どもにおしつけております。「自立」を第一に考

え、今一度、自分の関わりのあり方を見直すことができました。

・お話の中の「物事は因果関係だけでは語れない」の所 「why？」を使わずに・・・という点はたいへん参考になりました。早速子どもに何か伝える時、注意しながら関わっていきたいと思います。